



TITLE:

日本の地圖(一)

AUTHOR(S):

[藤]田, 元春

CITATION:

[藤]田, 元春. 日本の地圖(一). 地球 1933, 20(3): 186-202

ISSUE DATE:

1933-09-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/184197>

RIGHT:

日本の地圖

(一)

藤田元春

一
地圖は恐らく人類が繪を書き得るやうになつて間もなく出來だしたと見てよいものらしい。殊に其人々が遊牧民族でもあつた場合には、定住の民に比して其必要が直接的であつたことゝ考へられるから、まだ野蠻であり、蒙昧であつた時代に既に地圖に類似したものを所持した民族は多かつたにちがいない。故にペアリー・ロツス・マクリントツク其他の北極探検家は、いづれもエスキモーから其地方の略圖を得た。ラブラドル半島圖の如き、インヂャンが木の皮に書いた略圖をみて出來たといはれもすれば、タヒチのツバヤはキャプテン・クツクの乗船に請ぜられて歐洲にも行き、其の蘊蓄を傾けて、

クツクの地圖を作成したといふ。我近藤重藏の邊要分界圖考に於ても蝦夷や山丹人の砂書地圖が參考されて、彼のカラフト地圖が出來たのである。従つて地圖の發現といふことは、餘程古いことになるであらうと考へるが、歴史上では西紀前三八〇〇年アツカドのサルゴン王朝に於てバビロニアの地籍圖があつたと報告されるのを以て最古とする。カルデヤ文明と稱せらるゝ古代文化の搖籃地に於て農業政治がいはやく發展した必然の結果であつた。さうした源流から一方は西隣埃及に及び、ナイルの天恵による農政が行きわたり、ラムセス大王（西紀前三三三—一三〇〇）の時代には、素敵に立派な實測版圖が出來たといふ。この圖は後にアレキ

サンドリヤの博物館に所藏されてゐたので、ブトレミーの目に止つたと報告されたのみでなく、エラトステネス（西紀前二七六一一九六）が有名な大圏測定をやつた際、彼はアレキサンドリヤとシエーネの距離（大圏の弧の長さ）をば全くこの大王の實測圖によつて計算をしたとさへいはれるのである。してみるとこのラムセスの地圖は餘程精密を極めたものといつてよいのである。所が一方に於て西の方にさうした測繪の行はれた頃、東の方黄河の沿岸にも殷といふ國がはじめて神話時代の支那から目醒めてゐた。成湯が毫に都して王となつたのは實に西紀前一七六六年であるから、ラムセス大王よりも三、四百年は先進である。毫の都は國を商といつた。殷とはいはなかつたが、黄河下流の水害の多い土地（今の河南省歸德附近）であつたから、商は度々水のために都を移し、遂には河の北今の彰徳の附近殷に移つた。その都の一つを今は殷墟といひ、近年にそこから多くの龜甲文を發掘し

たのである。それが羅振玉氏や王國維氏の研究する所となつて、龜卜の文字から當時の文化を明にしうることになつた。

それによると狩獵時代から將に農耕の時代にうつらんとした時であつて、大史の官があつて建邦の六典を掌り、職方の官があつて土地を支配し軍政にも關係してゐたもので、後の周官の制の基源を示すのである。故に西紀前一千年の黄河沿岸は田園遠く開け、京・邑・都鄙の姿も珍らしく發達した土地であつたであらう。田・京・邑・都・農などいふ象形文が盛に卜文の中に用ひられてゐるのが其の證查である。

既にさうした象形文字が出来る位であり、職方氏が土地を治めたのであるから、當時既に地圖があつたと見てよい。やがて周文王の時代に於て禮制が行きわたり、井田之法が行はれたとさへ傳説されるのである。故に周禮の中に版圖といふ熟語が出ると共に、天下土地之圖なるものが官府に藏されたとある。それは各州の地域

廣輪の數、山林・川澤・丘陵・墳圻・原濕の名物、邦國都鄙の數を記してあつたとあるから、餘程精密な實測繪圖であつた筈である。筆者はこれはアツカドの文化が東西に波及した結果ではないかと考へるのであるが、愈々周も末になり春秋戰國にもなると、攻城野戰の上から地圖は大に重用された。それは燕の督亢圖の話によつて明であり、漢の蕭何は長安に入つてまづ秦の府庫に藏する所の圖籍（即地籍圖）を收めたとさへいはれる。

後漢の明帝の時、王景が河道を改修するに當り、河渠書や禹貢圖（支那全圖）を參考したといふのも當然のことであつた。故に鄭玄が周禮に、天下土地之圖とあるのをみてこれは今（漢）の「司空郡國輿地圖」の如しとのべたのである。従つて漢時支那本部では、殆ど全國の輿地圖を描へたのであるが、それといふのも實は九數又は九章といふ數學が進歩してゐたためで勾股絃の法や、三角法に類似した數學術が當時既に明

になつてゐた結果である。

そこで後漢の後三國時代を経て魏晉の間に歴仕した斐秀に至り、はじめて禹貢地域圖十八篇が完成するのである。これは漢以後南北が久しぶりに統一した結果で、晉書に斐秀の奉つた序文がのつてゐる。その序文には製圖の體といふことがあつて、古代地圖の書方が明にされてゐる。即地圖をかくためには分率（縮尺）、準望（方位）、道里（距離の實測）、といふ三つが必要であり、之を書き現はすために土地の高下、方邪迂直といふ事を實際にみて、うまく圖にまとめねばならぬと論じてあるのである。

蓋しこの斐秀の述べた製圖法の六則は、實に殷周以來天下土地之圖を書く際に用ひたものであつて、縮尺と方位と距離の三基本法則が確立せずしては地圖にはなり得ないのである。但しかうした實測に加ふるに、極星の天測などをすれば、所謂經緯線が出來て近世地圖となるのであるが、古代地圖にはさうした考はない。しか

し地圖の上に坐標となるべき方格をひき東西南北の方位を正しくし、甲乙二地物の位置を正しい道里の上におくことは之をつとめたものである。故にかうした古圖は方格圖といふ名で呼ばれるのである。西紀八〇一年（桓武天皇の二十年）唐の賈耽の海内華夷圖の如きは方寸百里の縮尺でいかにも立派な方格圖であるが、それが現在は阜昌石刻の禹跡圖といふものになつて、西安碑林にのこつてゐる。猶又賈耽の華夷圖の縮寫の石刻も残つてゐる。但しその出來たのは西紀一一三七年であるけれども、支那での正しい古地圖といへば今日この阜昌圖以外にはないのであるから、我等はこれによつて唐時以前の地圖の描法を判斷するより外に方途がない。之を要するに西紀前一千年以後、支那に地圖が出來はじめた後、西紀八百年にいたり海内を統一した方格支那全圖なるものが出來る程に發展したのであつた。

二

所が翻つて我國に於ける地圖はどうかといふと、勿論石器時代は不明であるが、孝德天皇の大化二年になり、秋八月詔して國々の境界を或は書し、或は圖にして奉らしめ給ふとあるから恐らく西紀六四六年頃には既に國々に地圖を書き得る人が行渡つてゐたであらうかと考へられるのである。従つて地圖の起元はずつと古くなるので支那文化東漸と共にかうした技術も夙に輸入されたと見るべきであつた。

ついで聖武天皇の天平十八年八月辛卯には、天下諸國に令して國郡圖を造進せしめられたといふのであるから、奈良朝になると地圖は全國的行渡つた。同時に世界の考もあつたので、其頃に出來た大佛の蓮瓣に須彌山世界圖が立派に彫刻されてゐるのである。國郡圖のみではない、農政上必須の圖籍も亦同時に各國郡で作つたとみえ、弘仁十一年十二月の官符を見ると、天平十四年、天平勝寶七載、寶龜四年、延暦五年及この年、前後五度も諸國から圖籍をすゝめ

しめられたといふのである。しかもこの年には文字でしるした田籍は證據にならぬから、田籍はやめて必ず圖籍を上げとさへ仰せられてゐる。そこで後の世になると民部省には全國から上つた圖帳數百卷を保管する程になり、個人の所有地をはじめ、神社・寺院・公民の所有地はすべて圖籍第三の何坪だとか、何々圖（地名を冠す）の何々里だとか記される所の券文を作るに至り、それが中世に迄流通するやうになるのである。

従つてこの圖籍なるものは、土地臺帳に類するもので、山川・田畑の見取書たるにすぎないけれども、其今日に残れるものを見ると簡單な見取圖だといつても、やはり方位と距離と方格（縮尺）は正しく實測されてゐるのである。即天平七年讃岐山田郡弘福寺領田圖、天平勝寶八載島上郡東大寺村田圖、又は同年の東大寺四至圖（拙著尺度綜考參照）等これである。いづれも條里方格をひいて、それに件名をしるし、或は地

物山川を記してゐるので、全く支那の方格圖式なのである。

筆者はかうした圖籍や坪書（ツツガキ）は實に大化改新に實行された班田收授の法に伴うて、是非なくてはならなかつたものと考へると共に、かうした實測描圖法を心得たものが一方では國學や大學で養成されると共に、一方ではさうした算博士の弟子共が國術や郡術に普く行き渡つてゐたこと、信じるものである。そこで不完全ながらも平安京の王朝の初めは日本全國の各國圖が出揃ひもし、各國郡の圖帳も出揃つてゐたとしなくてはならぬ。故に日本後紀には延暦十五年八月巳卯

是日勅諸國地圖事跡疎略、加以年序已久、文字闕逸宜更令作之、夫郡圖驛邑騎道遠近、名山大川、形體廣狹且錄無漏焉。

といふ詔があるのである。これはこの年日本の各國圖を更らに新しく撰ばれた命令であつて、この文によりて判ずれば、その地圖は郡國の驛

邑をも明記した道里圖に近いものもあつた筈である。そこでかうした國繪圖が天平と延暦と二回に出來た以上、これに呼應した二類の日本總圖が出來てよいわけであるが、日本總圖は古くから行基圖といふ一つの名しか持たないのである。予はこゝで所謂行基圖なるものについて説明を加へ、その二類の別を明にしないではない。

三

行基大菩薩行狀記などをみると、行基は三國の差圖をつくつたとあるが、彼は地圖をまとめた外に國府記七卷を撰してゐる。この書今に傳はらないけれども、恐らくその書に奈良からの道里略圖でもつけてあつたので、後世それが習となり日本總圖を行基撰といふことになつたのかと考へられる。但し現存せる行基圖なるものはすべて山城を中心とせるものであつて五畿七道への道路がしるしてあるものであるから、勿論行基在世時代の作ではない。而して現存せる

第一圖 行基圖



行基圖で最も古いものは仁和寺に秘藏される例の嘉元三年（西紀一三〇五）の寫本である。やはり山城を中心にして五畿七道への朱線がしるされ、セムラムダウ・トウセンダウ・ホクロクダウなどゝ假名付がしてある。山をセンと吳音で讀む所が古い證據になつてゐる。所がこの圖の

特色は陸奥・出羽の二國が越後と常陸の間から東方に突出して握り拳の形をなし、安房・上總・下總三國が圓く東京灣をつゝむといふ點に存する。不幸にして四國九州が明でないが、後に長

嘉元三年行基圖

第二圖



祿元年(西紀一四五七)に致仕して書を著した洞院實熙の拾芥抄に、やはりこの形の陸奥出羽の突出した圖がのつて、大日本國圖、行基菩薩所圖也、此土形如獨鉗頭、仍佛法滋盛也等と註記するに至つて、所謂行基圖なるものゝ形が確定した。之によると右の二つの特色の外に四國が四瓣花の形をなし、九州が圓くなつてゐるといふ姿になる。さうして其後に出る多くの日本總圖はすべてさうした形式を

踏襲して敢て變化しなかつたものである。

所が實物ではないが「さへぶり草」松の落葉に建久九(西紀一九三)戊午年の伊勢曆の初に記された、日本圖の寫がある。極めて略圖であるが、之を嘉元圖に比べると陸奥と出羽の突出がないのである。それは筆者の二中歴圖といふものに近似する。蓋し二中歴もやはり一つの日本圖をかゝげ、それに此本奥云、懷中歷卷第一大治三年四月一日學生三善行康寫之(古事類苑所載)としるされてゐるものであるが、この註を正しいものとすれば西紀一一二八年、平安末期白河法皇院政の時代に寫されたものを再寫したものである。處が不思議にもこの二中歴圖は、嘉靖二年支那で出來た日本攷略といふ本にもものつてゐる形である。その圖が二中歴を寫したことは、壹岐と對馬の位置の狂ひが二中歴圖のそのまゝであることによつて明にされるのである。(拙著日本地理學史參照)

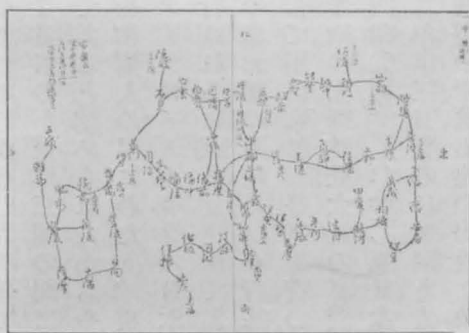
そこでかういふ事が云へる。即ち二中歴や建

久暦の日本圖といふものと、所謂行基圖といふものは、中世足利時代に流布したものである。

いづれも支那や朝鮮にまでも行渡つたものであるといふ事である。依て思ふにこの奥羽の突出した方は、突出しないものよりも新しい形であるから、好古小録に京都下鴨社の日本圖をみて

この圖は梨木三位祐之模本であるが、延暦二十四年改定の圖であり、古年代記の圖と大同小異とのべたことを正しいとすれば、この奥羽の突出形は延暦改定の行基圖といふことになる。即前記延暦十五年國郡圖再撰の詔を想起せしめる

第三圖 二中歴日本圖



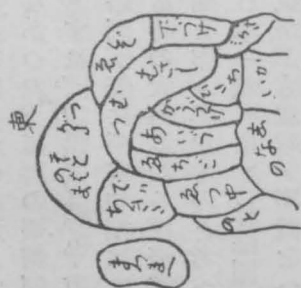
もので、奥羽の突出しない方はその以前、古い奈良朝に於て奥羽未平定時代から傳來で、實は行基圖なるものゝ本來の姿でなかつたかと考へさせることである。

即我國に於ては、まづ大治や建久年間にかうした古い形の日本圖がうつされ、後に下鴨社圖や嘉元圖の如き新しい行基圖が出来たのである。そこで「日本攷略」(定海薛俊著嘉靖二年「西紀一五二三」)の日本地理圖(嘉靖四十四年朝鮮版日本攷略

第四圖

建久年中の地圖

松の落葉所載



の圖は史學研究三の三にのつてゐる)では、古い形の日本略圖であつたけれども、やがて嘉靖四十年頃に出來た「日本一鑑」には明に日本行基圖として奥羽の突出した日本圖

が彼土で刊行されたのである。但しこれに先つて室町時代に我國にやつてきた申叔舟の「海東諸國記」(成化九年、西紀一四七三年)に既にこの行基圖は採録され、更に古く建文四年(西紀一四〇二年)に朝鮮で出來た「混一疆理歷代國都圖」にも行基圖がのつてゐる。かうした次第で足利時代には行基圖なるものが東洋三國の間に於て、日本圖の權輿であると認められたからやがてそれが葡萄牙人や和蘭人の手にわたり、西紀一五九五年のオルテリウス・テイセラの日本圖として行基圖が刊行されるに至つたのである。我國に於てもこの嘉元圖の系統をひく行基圖は、永く日本圖として用ひられ、豊臣秀吉の扇面地圖、加藤清正奉納の北野神社大鏡の裏圖にのり、下つて慶安四年(西紀一六五二)版日本國之圖となり、明暦二年申三月版の日本圖ともなつた。其後天保年間製の伊萬里燒の陶皿に於ても、同様な日本の形が記され、前後八百年間その傳統は消失しなかつたものである。

しからば日本圖としての行基圖が、古圖として徳川時代を通じて重んじられた事を外にして日本の地圖學界は些の進歩をしなかつたかといふと、決してさうではなかつた。延暦の國繪圖が命令の通りに出來たとすれば、諸國の驛邑・道里の遠近をしるした道路圖が既に平安初期には出來た筈であるから、當時の大街道たる西海道の如きは、夙にその繪圖を作り得たものと考へられる。そこで彼の「日本一鑑」には「桴海圖」と題し、明に瀬戸内海航路から琉球・臺灣をへて廣東に至る航海圖が出てゐるのである。それはその著者鄭舜功が豊後の大友氏に囚へられてゐた間に手に入れた海圖である。そこで瀬戸内海航路圖なるものも、行基圖と同様に古く存在したので、徳川時代の初期になると、西海陸細見圖と云ふ形になつて寫本となり、後に版本ともなつてモンタヌスやケンブエルの手に入ることになつた。従つて内地には其の立派な金屏風の現存するものもある位である。よくこれを見

ると道里の距離を正しく實測記入してゐるので所謂斐秀の製圖法が大化以來連綿として日本に傳はつたと考へざるを得ざらしむるのである。天下が亂れてゐる間はさうしたものに手はつかないが、愈太平になると新に地圖は修正される延暦十五年以來數百年の間全く顧みられなかつた地圖も、秀吉が征韓に際し、朝鮮の地圖をつくつて赤・白・黃などの色彩を施し、赤國をとれとか、白國一圓を仰せつけるなどいふ軍令を出し、自分の手には三國地圖の扇をもつてゐた位であるから、この頃になると軍事上からも、地圖を必要とした。

そこで文祿・慶長の檢地の頃には、ある國では新に國繪圖をつくるものがあつたらしく、攝津國の如きは慶長年代の國繪圖と稱せらるゝものが現存してゐる。予はさうした國繪圖は、實はずつと古い王朝の頃に上つた下書の類のが其の源流として存在したものと考へてゐる。後に文治年間源賴朝が奥羽を征伐した時、平泉の館

が没落し、奥州・羽州兩國の省帳、田文たぶんが悉くやけたからといふので、兩國圖の復舊をはかつた際、奥州住人豊前介實俊・弟橘藤五の兩人が暗注してゐて、直ちに兩國の國繪圖をすゝめ、郷里・田畑・山川・河海盡く記入したと報告されてゐる（吾妻鏡）位で、これも可然き種本（下書）が兩人の座右に存在してゐた確證であるといへると思ふ。そこで文祿檢地に際しても猶古い水帳もあれば圖籍の存するものもあり、或は國によつて古地圖の存在した數も少くはなかつたであらう。現に慶長十六年藤堂和泉守が肥州繪圖をつくつたと報告されてゐる程である。茲に於てか家光將軍の正保年間に至つて（西紀一六四四）新に國繪圖をつくらしめ、全國的に之を整へるといふことも、出來得たのであらう。

四

近藤成齋の「好書故事」卷第二十八によると寛永廿一年（十二月二十六日正保と改元）の令なるものがあつて、國繪圖に關する命令が出た。

それには「道法六寸一里にいたし、繪圖に一里山を書つけ、一里山無之所三十六丁一里に間を相究め、繪圖に一里山書付候事」とあるのである。即、實測圖であつて、一里を六寸とすれば概算二萬一千六百分一といふ大いスケールの繪圖であるから自ら一枚の國圖といふものは中々の大さで、武藏圖の如きは豎一丈九尺九寸、横一丈七尺にも達したものであつた。所が同じ好書故事を見ると、幕府は其後元祿に新繪圖を再製せしめ、之を新繪圖と稱してゐる。處がこの際之を吟味してみると、正保の古繪圖の外に更に古い圖があつて或圖では一里を四寸から四寸五分、即ち三萬分一程の小スケールでかいてあり、正保の古繪圖と雖も、官令は一里六寸であつたにも拘はらず、和泉國圖の如きは一里一尺に達した。即約一萬三千分一からの大スケールで記され、遠江圖は一里七寸程即ち一萬八千五百分一といふ、これも大きいスケールで記されてゐるといふ次第で全く統一がとれてゐなかつ

たのである。然しこれは、實に古い時代から傳來した國繪圖下書があつて、或國では之をうつした結果であつたからであらう。換言すれば文治五年に橘兄弟が奥州の國を直ちに差し出したやうに、王朝の古圖の下書又は模寫品の類があつた國では、とにかく之をうつして呈出したからであらう。さうでなければ、かやうにスケールがくるうといふわけがないからである。

そこで元祿になつて愈スケールを六寸一里に統一して、一里星をかきつけた國繪圖を再進せしめたのである。今度はよく揃つて元祿新繪圖八十四枚、一枚ごとに外箱をつけ領主の名を記し、附郷帳五十二冊は元祿十三・四・五・六年の歳月及領主の名をしるしたものと、城繪圖百五十七枚といふものが出揃つたのである。今度の國繪圖の大きさも同じく大きい武藏國圖を例にとると、豎一丈九尺二寸、横一丈七尺二寸、正保よりも二寸づつ大きくなつてゐたのであつた。いづれにしてもスケールが大きいから開舒に不

便である。そこで享保四年になり、將軍吉宗は建部賢弘に命じて、六分一里（面積で百分一小さくなる）の繪圖をつくらしめ、然る後その各國圖をつぎ合して日本總圖をつくらしたのであつた。その國と國とを繼ぎ合はすために諸國の名山を望視し、方向に従つて之を一つにまとめたが、其結果大略二十萬分一の日本圖が出来たのである。

賢弘の意見によると、地圖はまづ候、極、驗、食をもとし、遠望、丈量を行ひ、然る後にかゝねばならぬ。即天文觀測と三角測量を行ふべきであるが、今俄にそれが出来ない。故に名山を望視して古圖を繼ぎ合すに止めた。しかしそれでも元祿の總圖に比べて地形は全く正しくなつたのとてゐるのである。かうした變遷をへて即ち慶長・正保・元祿の三度の大きい繪圖から遂には一つの正しい日本全國（約二十萬分一）を完成する途をひらいたのである。そこで伊能忠敬に先だつて安永三年（西紀一七七四）には長久保赤水の

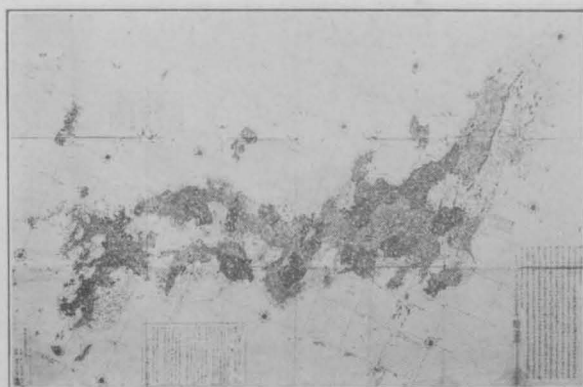
「日本輿地路程全圖」なる比較的正しい日本圖が出版されるといふ時代になつたのである。

官邊に於

てかやうに各藩主に命じて國繪圖をつくらしめ、それが正保や元祿にすゝめられたとなる、その總圖を見た人は、或は之を屏風にするとか、寫本にすると

かする。そこで今迄の日本總圖として珍重してゐた行基圖は、これでは駄目だといふことに氣

第五圖 日本輿地路程全圖 寛政三年



がついてきた。やがて民間に於て、之を改正して新に地圖を出版するやうになつた。茲に於て行基圖でない類の異なる日本圖が世に出る事になつたのである。

五

徳川時代は太平久しくつゞいたから、人々の交通も安全になり、旅行者も増加したので地圖の用は増加した。そこで寛文六丙午歲八月に吉田太郎兵衛が出版した日本圖の如きは、單に一枚の總圖ではなく、二三枚の地圖集即アトラスをなし、日本から外國への航路里程をあげたのみでなく、本朝五畿七道經路方角豎横遠近の數量をしるして、里程表の外に、境界の事、西國せとの覺などいふものを詳述し、後の世の道中明細記といふものゝ濫觴になつてゐる。

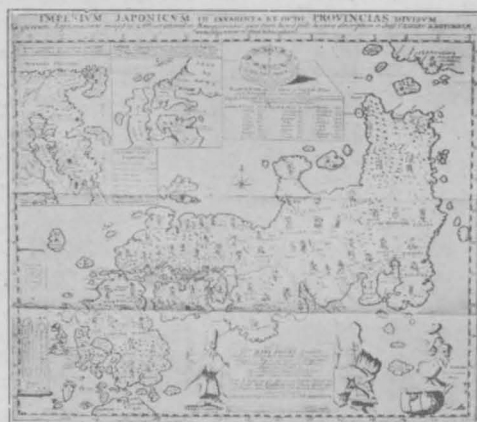
今その圖をみると奥羽の尖端は行基圖の如く尖らないで、青森灣や野邊地灣が入つて津輕と斗南の兩半島が出来てゐる。又四國や九州の形は岬角の出入が增加して、全く行基圖の特色を

失ふに至つてゐる。この日本圖のみでなく寛文二年(西紀一六六二)に京の伏見屋から出版した扶桑國の圖といふ日本圖も右の寛文圖と同様に奥羽の兩半島が出来てゐて行基圖ではない。それでも圖の下にこの圖は行基菩薩の所圖也と記してゐる。ついで延寶六年(西紀一六七八)には大日本圖鑑といふのが出るが、この圖は扶桑圖よりも奥羽尖端の兩半島が

第六圖 寛文二年版扶桑國之圖



第七圖 ケンプエルの日本圖



ケンプエルの日本圖(一七二七年版)圖解
 ケンプエルの日本圖にのせたシヨイヒツエ
 ルの日本圖である。延寶六年の日本圖を参考
 したことはその北邊圖がそのまゝであること
 によつて明である。

明に大きくなり、そのさきに松前半島を旭川(石狩川)までしるすといふ特色をもつのであるが、ケンプエルの日本記事に採録され、シヨイヒツエル作日本圖(西紀一七二七年版)の種本に

なり又西紀一七三五年佛國ペランの日本圖になつた。ついで貞享四年(西紀一六八七)になると、本朝圖鑑綱目といふのが江戸の相模屋から、同

じく元祿二年(西紀一六八九)に同じ名の本が京都の林吉永から出版される。其の形は版本に制限されてゐるけれども、記事の多い點に於て全く類を異にしたもので、後には石川流宣といふ圖工の名を出し、元祿四年以後何回となく名を改めて出版されるに至ると同時に、大阪では難波陳人馬淵白藁庵の手で大日本圓備圖といふものが出版される。これ又形の正しい日本全圖で道里が正しく入つてゐる。かくて元祿時代には扶桑圖、延寶圖、流宣圖及圓備圖の四種の日本圖が出揃つて全く行基圖の位置を奪ひ、折柄渡日したケンプエルに蒐集されて一七二七年以後の西洋出版の日本圖の原據になるのである。しかし爾後坊間に發售する所のものは、多くは道中圖であつたり、鳥瞰圖であつたりするため全圖としては形が不正に傾いたものが多くあるので、長久保赤水の日本圖が出版されるまでは格別の進歩をしめさない。後文化年間歐亞堂田善の作つた銅版日本圖が出来たりした。そこで

長崎にきたシーボルトにこれらの作品が蒐録され、彼の大著「日本」にそのまゝ、色彩を同じくして刊行されるといふ歴史をつくつた。

かうした時代になつたため、元祿以後は國繪圖を刊行するものも増加し、郡圖・町圖・山水圖・道中圖等汗牛充棟管ならずともいふべく、古地圖類の刊行が盛んになつて明治に及んだ。詳細は栗田元次氏の「江戸時代刊行の古地圖」に譲る。

六

最後に我國で出来た世界圖を概説すれば、最初は慶長元和の御朱印船の往來した當時、羊皮紙の海圖が彼土の船人から傳へられた。そこで西洋出来のものに和譯を加へて用ひたと見え、其標本が今も京都原弘二郎氏の許に所藏される。ついで洋皮紙の上に彼の圖をうつし、地名はすべて日本譯をしたものが出来てこれを實用するに至つた。その標本は徴古館に出品されてゐる角屋の海圖又は大阪平野郷末吉氏の航海圖

の如きこれであつて、共に慶長十四、五年頃（西紀一六一〇年）のものである。所が寛永以後になると同時に我國に傳はつたオルテリウスの世界圖だとか、利瑪竇の坤輿圖（慶長七年、一六〇二年出版）などが舶來し、家康でさへ見た世界圖屏風といふものが出来たらしく、當初は和譯をしなかつたのであらうが、寛永以後になると家光の命で世界圖屏風をつくるやうにかはつた。そこで多くの屏風圖をはじめ、寫本の世界圖で日本譯されたものが出来る時代になつた。池長盈氏は安土屏風といふものを所持して日本最古だと云つてゐられるが、寫眞の示す所によれば、其形は坤輿圖に近い。地名は全く無い、日本やエゾの形から見ても慶長以前のものではない。慶長七年以前にさうしたものが東洋にはあり得ないと考へられる。いづれ見た上で考證をするつもりではあるが、多分今日多數に残存する世界圖屏風と同様に寛永以後のものであらうと信じられる。ついで正保丁酉に至つて西紀

第八圖 寛政四年司馬江漢世界圖 東半球



一六四五年以後長崎で萬國總圖といふものが出る。それは全く利瑪竇の踏襲にすぎない。池長氏の所藏圖にはその寫本もある。ついで寛永二年になつて(西紀一七〇五)江戸の相模屋から萬國總界圖が出る。これは長崎版の焼直しであつて利瑪竇に従つてゐるが、當時幕府にはオランダ献上の地球儀や地圖が多く藏され、中にも新

井白石の見たオランダのブラウの圖(帝室博物館現存)は全く類を異にした平射圖法による兩半球圖であつたため、白石に至つてはじめてプロセクションの研究をするやうになつた。處がこの兩半球式の地圖は寛政四年(西紀一七九二)になつて司馬江漢の世界圖銅版として世に出で、同八年橋本宗吉のオランダ新譯地球全圖にも用ひらるゝに至つた。其後彼土の書籍や地圖をみて翻刻するものが増加し、いつの程にかプロセクションが理會されだした。其結果文政七年(西紀一八二四)には高橋景保の新訂萬國全圖(兩半球圖式)が官版として世に出るし、嘉永五年(西紀一八五二)には新發田收藏の新訂坤輿略全圖が出で楕圓圖法の復舊をとなへ、安政五年(西紀一八五八)には武田簡吾の輿地航海圖が出てメルカトルのプロセクションを表示し、これに先つて嘉永六年(西紀一八五三)には地球萬國方圖といふ方格圖さへ出で、各種のプロセクションが出現するに至り、我國の學者はや

うやくにして地圖に必要な經緯線の意義を悟ることになつた。蓋し明和安永以後蘭學が盛んになつた結果、天測の實行を爲し三角測量をもする時代にもなつたから、伊能忠敬が出て寛政十二年(西紀一八〇〇)以後文政四年迄の間に日本の沿海實測圖を完成し、慶應年間、開成所から官版實測日本地圖として出版された。やがて天保年間に三たび幕府の手で國繪圖が出来、ついで明治以後陸地測量部が事業を始むるに際し、直ちに新らしい地形測量が出来上るわけではなかつたから、忠敬の測量により、天保の國繪圖を材料とし輯製二十萬分一圖を作る事になつた。

越前丹生山地北部の第三紀層

竹 山 俊 雄

越前に廣く分布して居る第三紀層に關しては二十萬分の一福井圖幅及び其地質説明書とナトルスト氏の植物化石の研究以外には殆んど參照

即明治當初の日本地圖の材料は既に前代にあつたのである。かくて明治四年以後測量を始め、明治十六年以後陸軍で統一した測量が出来始め明治二十一年陸地測量部條例が公布せられて今日に至る約四十年、既に北は千島より南は南洋諸島に亙る測量が終了したので五萬分一地形圖といふものが完成したのである。これ實に、我國地形圖の基本である。ついでに二萬五千分一二萬分一、一萬分一といふ風の大きいスケールの地圖が局部的に發賣されてゐるのである。予はこゝで筆を改めて明治以後の日本地圖について其發達を概觀しようと思へる。(つゞく)

す可き文獻がない。従つてその時代に就いても詳しい事は全く不明であつた。唯甲南貝類莊の矢倉和三郎氏所藏の越前産 *Vicarya verneuili*